

都繪馬鑑  
三

洋学文庫  
文庫8  
D 256  
3



文庫  
D 256  
3

都繪馬鑑三之卷目錄

目錄

土佐坊昌俊之圖

祇園社并旅所之圖

○古代系物之圖

○於乳母日傘之圖

○延宝年間芝居例の圖

○収着楽屋入り之圖

○僧覆面編笠之圖

○旁物店之圖

○古代牙僧婦之圖

北野 長谷川等伯画

○横二回壁之圖

祇園 寺者不知

○横四回壁之圖

○同駕籠之圖

○古代之絃海老尾の圖

○同擔幕の圖

○医師の圖。小枝箱の圖

○女編笠の圖

○桑原丸形燈の圖

○土弓之圖

更登  
花書印

○草履賣之圖

○髪結床の図

○婦人笠着之圖

祇園日直清親画

○大和大路を在湯殿山狂言之圖

横一回才 望一回

○高野山万年草を在魚車の寫

○古代批燈の図

清水 才者不名

○六方之圖

横五尺 望一回才

○大森彦七負兔女圖

清水 又岡春卜画

横二回 望一回才

清書院藏三之巻目録

都繪馬鑑三之巻

○土佐坊昌俊之圖

北野社繪馬より掲ぐ

慶長十二年申六月長谷川等伯画

傳云源判官義経を。總倉右大将頼朝之の代官として。蒲冠者能頼

と都小上々本曾義仲 朝日將軍 云 が悪逆を討。平家源西海邊討

し。宗盛 平信盛 たる門督清宗 宗盛 子 具て總倉よりし。くし

頼朝を義経が軍忠の神速を以憎み。殺す。頼朝子三景時が義経

を信用せし。終に骨肉讐敵の如くを殺す。後継も肉にされ。て

都小上

○頼朝の生得流を好むの癖あり。頼朝又奸佞して人を殺する癖あり

東鑑に頼朝が佐田人夜須七郎の義経を殺言し。頼朝夜須と頼

朝は乃び頼朝を質に執る。其料代として。總倉中の道徳を殺し。めい

面目を失ふ事あり。終に上々重く頼朝が義経を好むを好む有る事あり



慶長拾三<sub>甲</sub>曆  
六月吉<sub>日</sub>祥



自雪舟五代  
長谷川法眼等伯筆

奉掛  
御神前



中ノ一

ふ其後懲りもふく... 好の... 信用あつて一生

○或云... 軍潮... 我... 其... 及... 此... 二階堂... 命... 禮... 上... 故... 亦... 遺...

辨慶と黒草威の... 五枚塊を... 大黒... 馬... ち... 吾... あり... 乃... 君... 十... 乃... 纏... 吹... 小... 牛...

の平地等がわがしん平地の夏別よ義経の跡に押寄。園を結て  
賣つる義経其夜を酒小酔し。跡居りしが白拍子舞を買  
き女や。園をばより糧を取出。義経もなつか。義経合破と記  
あは遊教せし。下も皆宿小帰して居。義経をば信收人  
張と。跡居防。辯まを許さく。あ。河鉾小。衣門の  
子欲押寄。と。史長刀。振て討て。た。此強を。園。に。田原。序  
岡八郎。伊勢。と。即。急。井。六。郎。佐。藤。四。郎。之。法。就。馬。尾。之。郎。後。平  
四郎。佐。藤。方。此。より。跡。来。て。ち。佐。が。勢。の中。刻。入。難。也。と。記。を  
その力を振てち佐が。婦子。を。即。が。馬。を。切。斃。て。ち。即。を。生。捕。り。弁。ま  
を。大。賊。と。囚。り。て。ち。佐。が。後。才。伊。方。五。郎。盛。直。氏。生。捕。ち。佐。房。昌。俊  
を。討。て。仕。扱。し。一。法。取。多。く。討。せ。僅。七。人。に。り。て。鞍。馬。小。尾。矢。傳。心  
が。谷。小。尾。を。就。尾。に。見。せ。し。弁。ま。に。生。捕。し。六。条。河。を。あ。く

首を刎らるる

去法房昌俊二階堂と云。信谷金王丸。大和國の住人。素良法師なり。  
當國針の庄。西金堂。御油。料。あり。代。友。小。河。四。郎。遠。太。真。福。寺。の  
律師。快。多。を。信。し。年。貢。所。を。押。止。め。西。金。堂。に。小。欲。討。て。堂。に。昌  
俊。を。一。針。の。庄。に。去。り。遠。太。真。夜。討。て。快。多。を。昌。俊。を。取。籠。め。日  
に。神。木。に。振。ひ。て。奏。問。せ。ん。昌。俊。を。氏。退。け。し。神。木。氏。代。を。分。大。流  
憤。く。奏。を。信。し。より。別。當。兼。忠。本。作。く。昌。俊。を。捕。り。め。大。把。次。郎。実  
平。及。郎。ら。後。實。平。と。親。く。あり。去。把。昌。俊。を。籠。倉。小。具。し。て。形。胡。小。比。之  
心

○因。て。お。師。と。お。松。平。系。に。折。言。文。社。と。云。あり。信。し。く。去。佐。房。昌。俊。を。祀。り。す  
云。例。年。十。月。廿。日。折。言。文。社。に。て。け。社。は。流。る。者。多。し。と。是。も。水。火。の。事。小。佐。房  
が。あ。い。を。あ。げ。飛。を。は。社。に。招。て。扱。す。と。云。去。佐。房。昌。俊。の。後。に。記。法  
文。書。し。故。事。より。信。し。し。は。小。河。四。郎。代。友。小。河。四。郎。の。利。を。信。し。て  
部。り。と。利。を。信。し。し。は。小。河。四。郎。代。友。小。河。四。郎。の。利。を。信。し。て

子代古くや。此街古伝房を祀ふあり。當社を祇園の持社としてあり。天四古神と奉事蓋鳥尊と持て居る。五男と女神を生後小持の事代主とありて定まれば約り神あり

○祇園社并旅所之圖 祇園社繪馬所本指く

延寶四年より

祇園社祭神素盞烏尊 午頭天王 八王子 五男三女神と祀り 稲田姫  
午頭天王を初と播磨國明石浦小壘跡まゝ後廣峯に移り  
の西一里あり 其後感神院に移り 貞觀十一年始播磨より遷り  
傳云清和天皇貞觀十八年に疫神宗成依り万民瘠り日良磨京  
中此男女引く。六月七日十四日疫神を神泉苑小送る。其次の年ま  
疫神堂あり多と百姓神輿を神泉苑小送る。祇園寺 其神輿を置  
所を八坂御感神院と云寺あり。神殿あり故昭宣公御殿と云  
せし神殿と云是故且當社を殿舎造あり

別記云貞觀十八年南郡の四如光小寺ありを遷して生駒寺と云  
傳云安並に教養寺あり。今年夏六月十四日天神を本山の  
里を移し密跡寺と云或記云本寺を午頭天皇より。下免南郡水神社  
へ遷りあり。四如光と云祇園林と遷せり

○扁額小園より祇園社より西を四乗系極の旅所まで代寫以延寶四年より今に至る百四十餘年祇園社を今と遷る

園中幸殿の南表西の方階の傍小舎あり。古は舎をくさる拍を  
出して諸人の賽物を入し。此舎後より古蹟を納るありて之  
幸殿の傍より後東小の方小移り。今此イニコの小舎を  
○拍をかくて賽物を入し。其古くは佛寺社本多くありし。其と後今  
七月十日松系の本六の燈皇寺の聖天延より燈堂の傍より拍を  
出して賽物を入し。其殘りあり

元二堂の傍小燈堂あり。近世破壊して堂取く。後々南門の傍  
小トあり







清水寺

國中の人物は古風の様ありと  
いふも低きありさうか  
當細うさうさうさう  
故よ其一二〇宛と  
紫がうさうさう  
別よ生と

繪師  
繁尚岡  
梅本隆廣  
林吉信

因云豊之祿所を今のかみ移る時をけきとて一面の河原なり。  
其の前者六条祿起一遍上人の修氏又ふ祿所の小西は四十八箇  
所乃無屋あり又今の四条乃場小一遍上人は乃修禪をせり  
そ東加茂川小架に修乃るよ木の寺井あり。是祇園社一の寺井  
なり。今其の内祿河小架本を之六月祇園をまに斎竹と建るこ  
一乃寺井の  
透能なり

圖中芝居の俵四條街小例小之槽南例小二槽繩子四條の北小二槽の  
と俵の幕小名代の後を付るハ其は芝居より東にわたりぬ  
齊々の頂も國の如く四條に五槽あり。其後進く小減くを以て小例小  
二槽南例小一槽ありしが寛政六年焼失の後南北二槽とせり。繩  
子は芝居より寛保元年に焼失より絶り  
因云古くは乃りし四條街小まな五ヶ所繩子小二ヶ所又四條小橋  
中寄町の南例小一ヶ所北例西二ヶ所乃北角一ヶ所を繩子系橋の人  
形芝居修小兩輪まなしとあり。又宝曆七八年の火より東に垣東の  
南小一ヶ所ありしとまな  
僅ハ九年より絶り



圓山

石鳥居



八坂塔

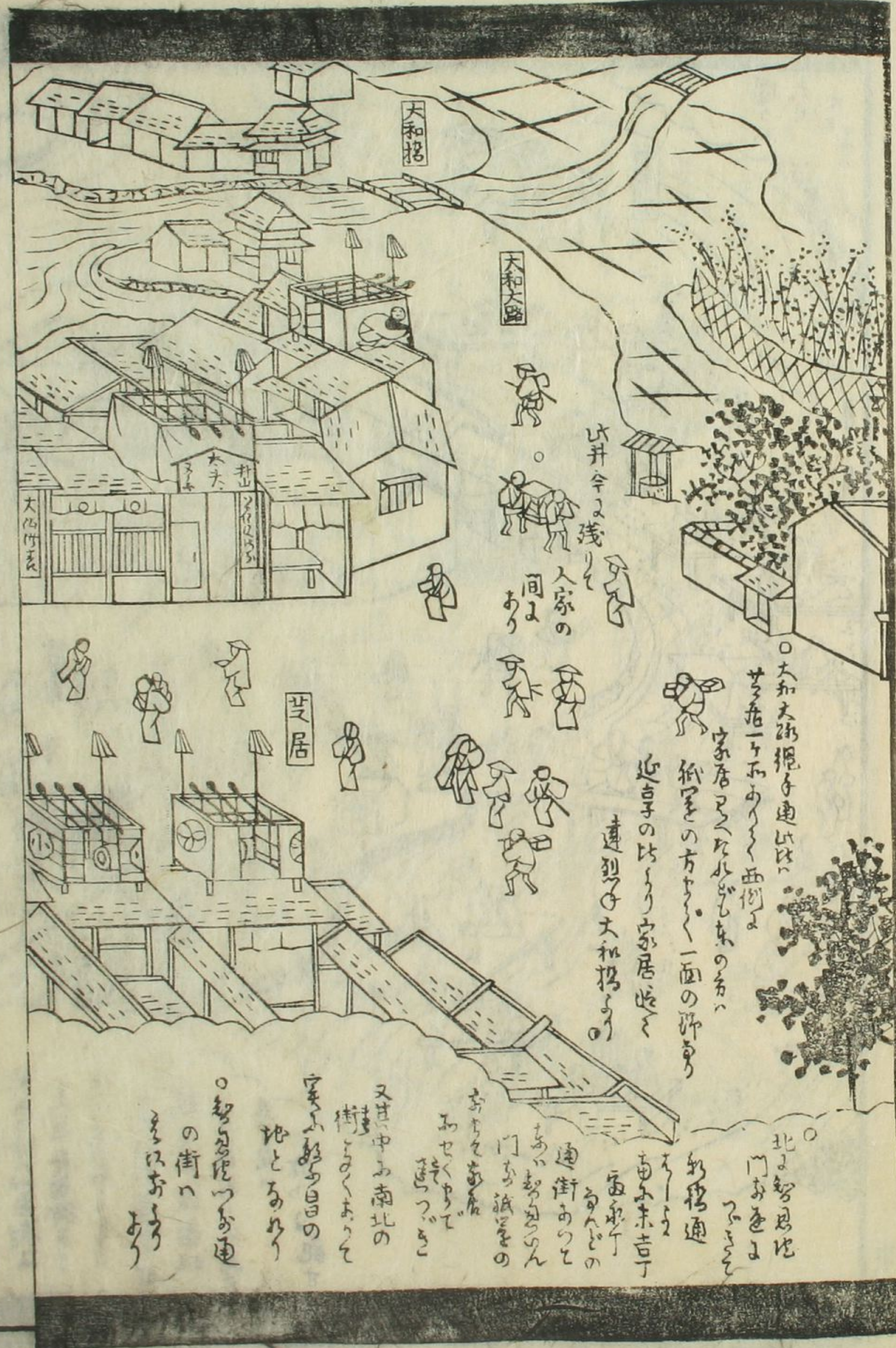
文政三年  
 ちの南東の  
 方の地と  
 東大谷  
 王  
 新道  
 王

葉合ノ派

牛王地

吉の地  
 新道  
 文政三年  
 ちの南東の  
 方の地と  
 東大谷  
 王  
 新道  
 王





○天和太盛  
大井全又浅  
大仙竹屋  
大木

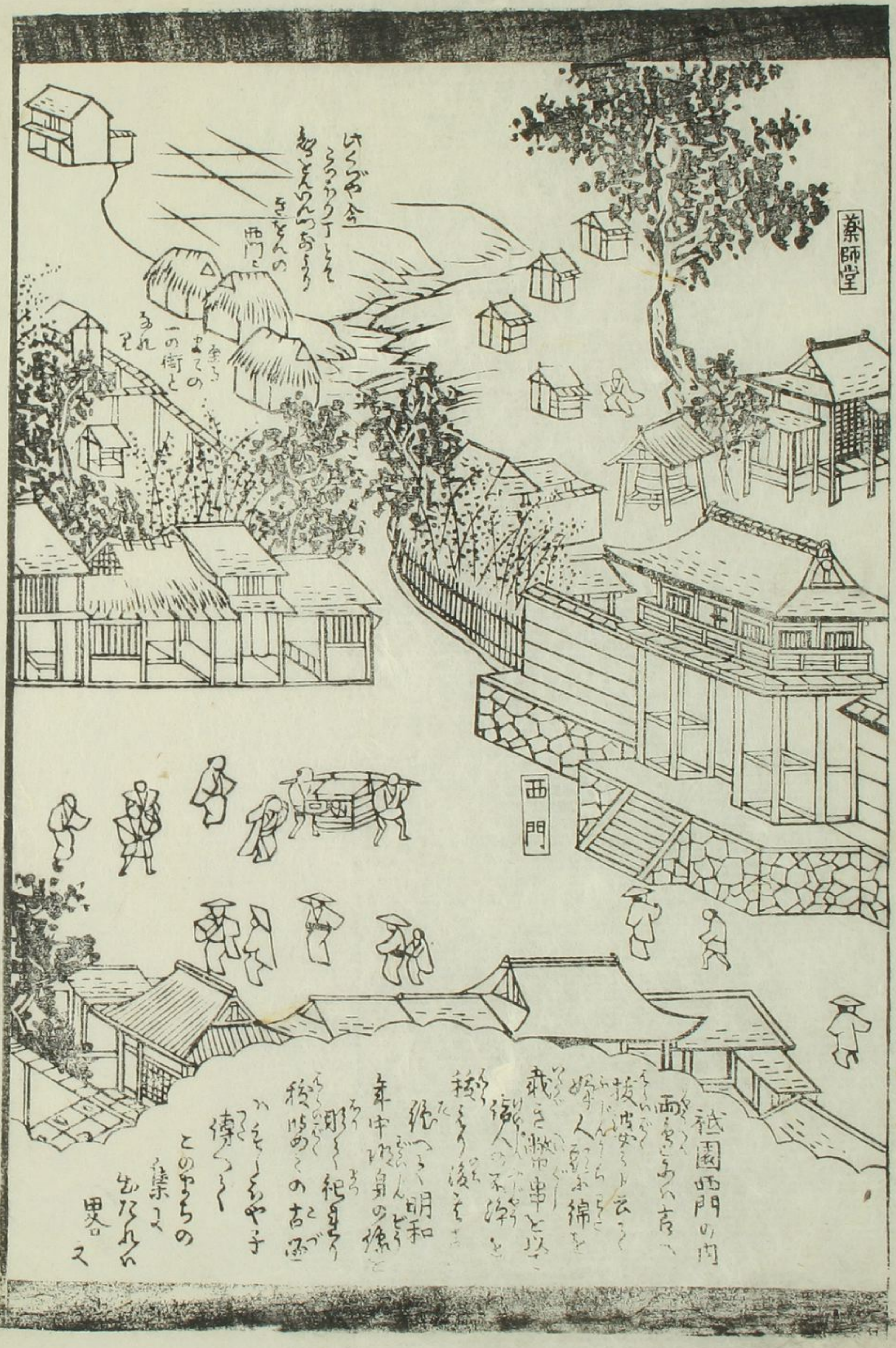
○天和招  
芝居

○大和太盛  
大井全又浅  
大仙竹屋  
大木

○大和太盛  
大井全又浅  
大仙竹屋  
大木

○大和太盛  
大井全又浅  
大仙竹屋  
大木

○大和太盛  
大井全又浅  
大仙竹屋  
大木



○西門  
西門  
西門

○西門  
西門  
西門

○西門  
西門  
西門

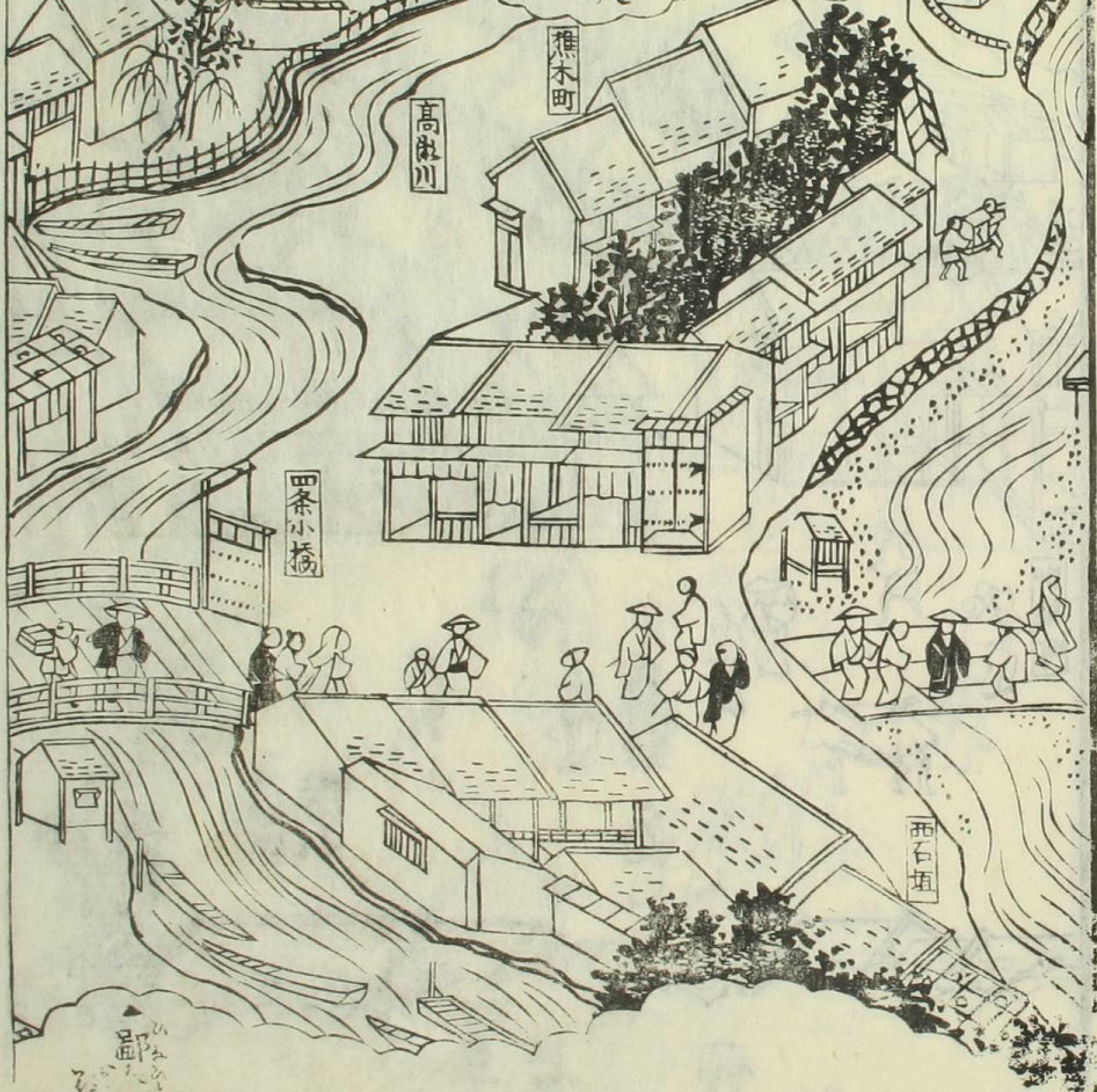
○西門  
西門  
西門

○西門  
西門  
西門

○西門  
西門  
西門

○西門  
西門  
西門

十八日よりの  
 ちぐがや川  
 み達の作  
 の水屋の頃  
 ろりーのま  
 年くお  
 明和安の  
 南一町  
 ねの  
 川の中  
 一町  
 川の中  
 一町  
 川の中  
 一町



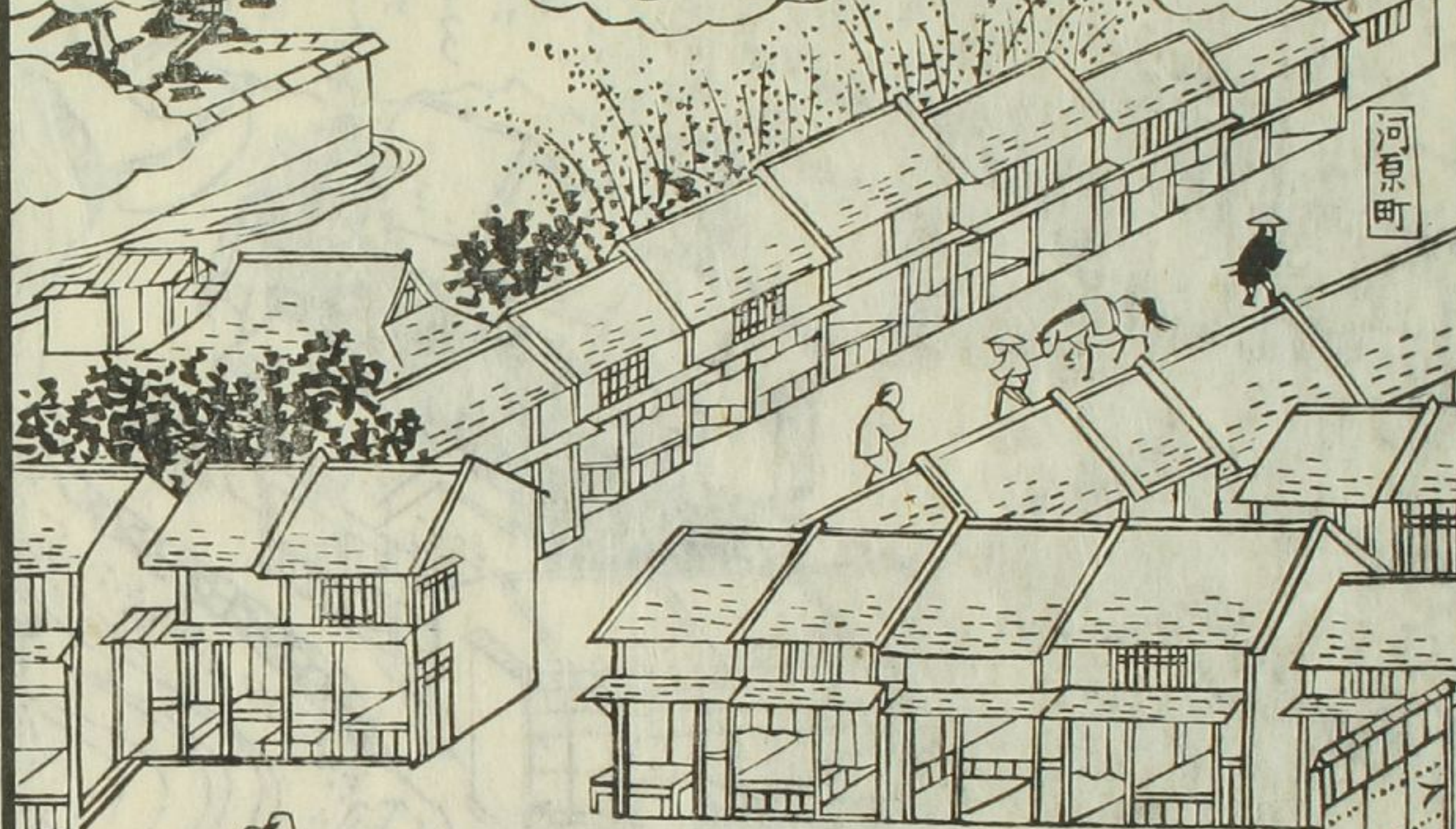
高津川  
 西石垣  
 四茶小橋



延室の頃  
 芝居五箇所あり  
 後三箇所とす  
 寺は六ヶ所あり  
 焼失の後南北  
 二箇所とす  
 具は  
 記す

同  
 六月  
 七日

河原町人家の  
 ありは家の  
 内介を定る  
 封授する  
 古の一面の  
 河原町に  
 豊太司  
 とも師の  
 四方に討伐  
 とか  
 後ら  
 中  
 介  
 け  
 町  
 の  
 月  
 危  
 街  
 河



河原町



御旅町

宿坊  
 社務  
 執行  
 願中  
 敬自

中

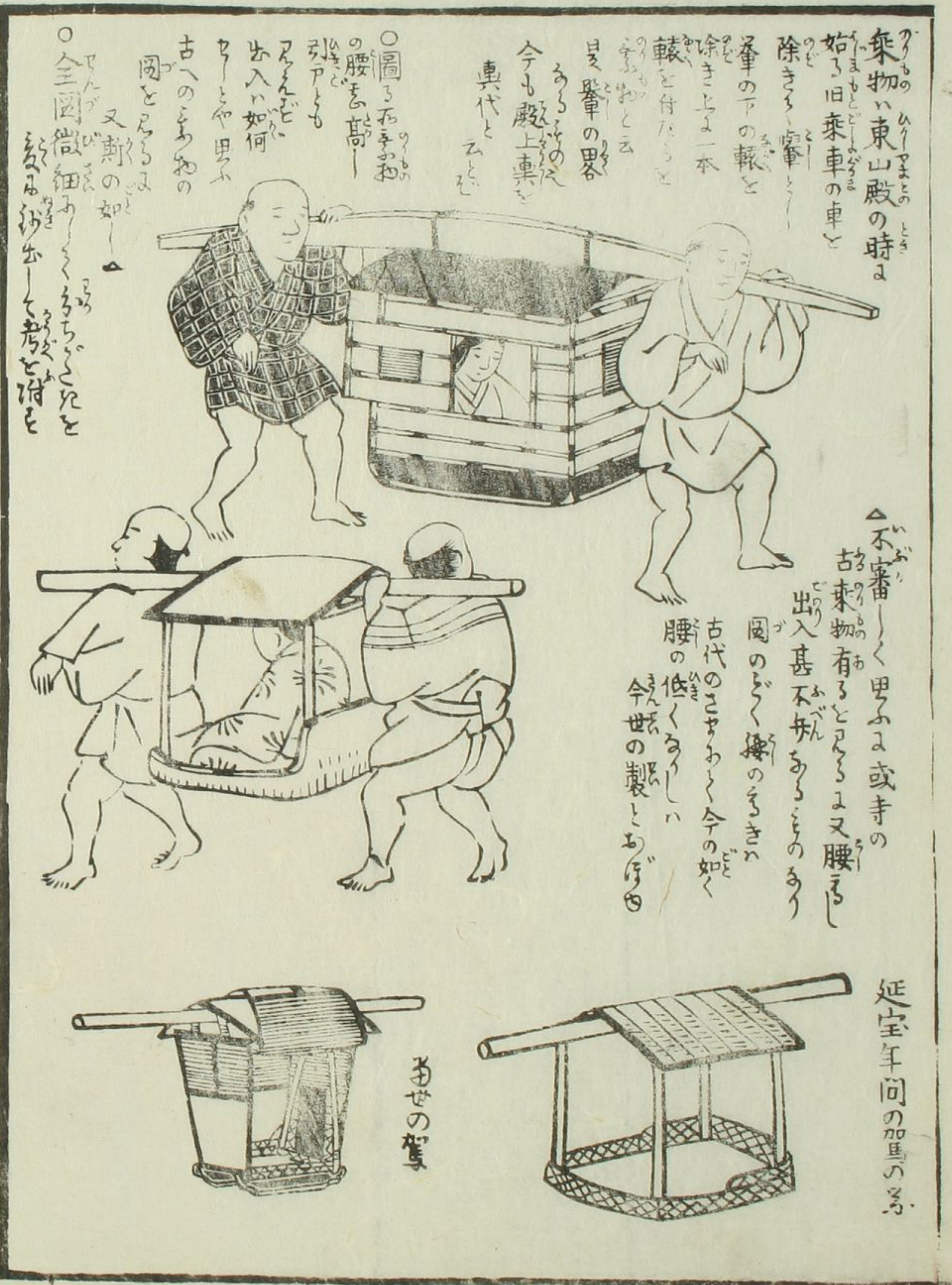
西よち作の  
 石垣を曲よりし  
 今ん其地や  
 森まき  
 云々

御旅所

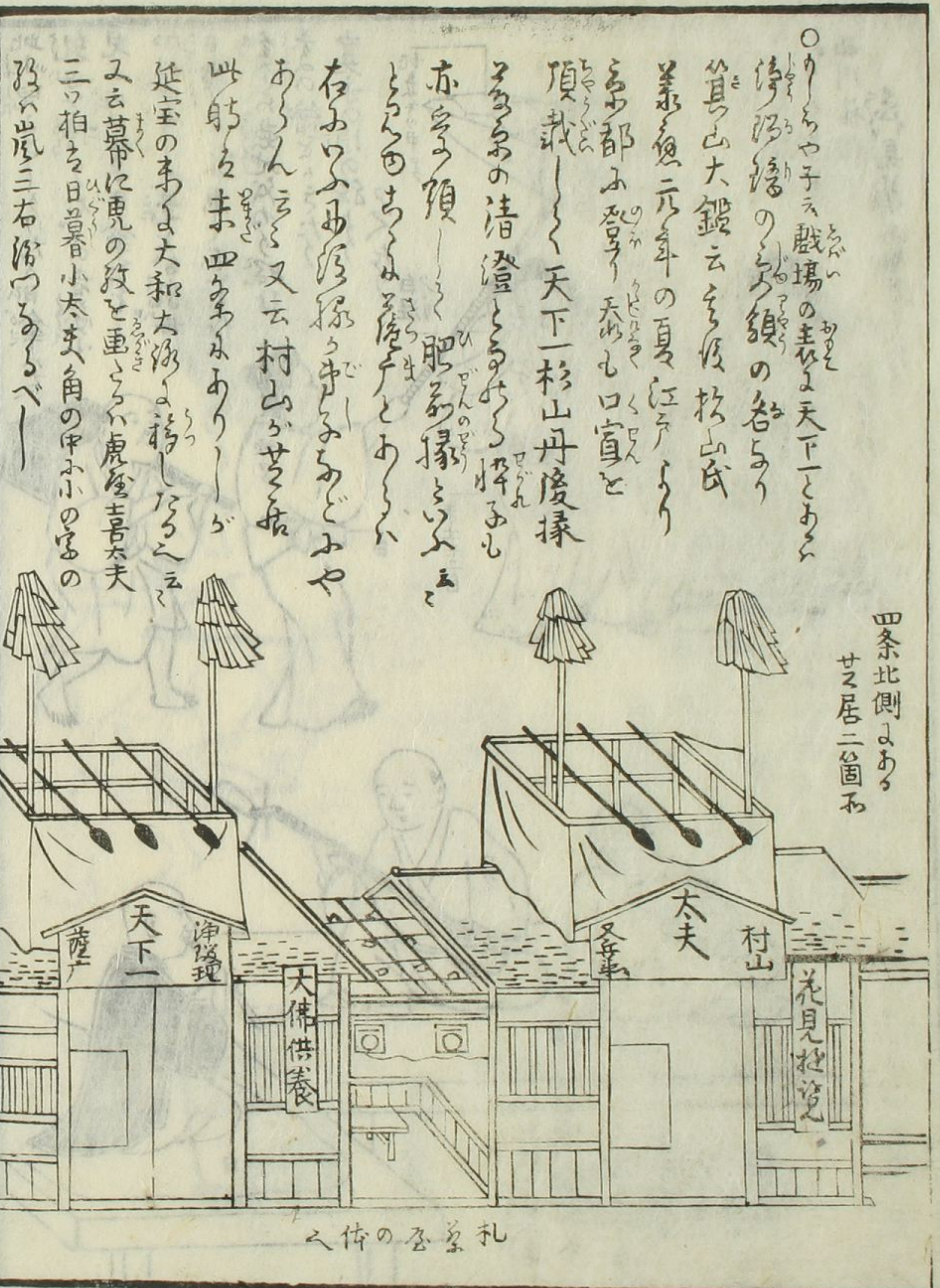
御奥舎











○りちや子え 戯場のまは天下とある  
 浄瑠璃のつづ緞のむらう  
 眞山大鍛云々後松山氏  
 美濃元元年の夏江戸より  
 多都ふ登り天姥七口直と  
 頂裁〜〜天下第一山丹後採  
 多々あの清澄とつづつ採ふも  
 亦多々頂〜〜肥後採とつづつ  
 くら田あ〜〜後産とあ〜〜い  
 右あ〜〜あ後採とつづつあ〜〜い  
 あ〜〜ん云々又云村山がせき  
 此時々まあ四あ〜〜あり〜〜が  
 延宝の末〜〜大和太後〜〜務したる云々  
 又云幕に鬼の紋と画とつづつ虎を喜太夫  
 三つ拍と日暮小太夫角の中ふ小の字の  
 及び嵐三右衛門つづつる〜〜べ〜〜

礼の至の体



小枝お持  
 漫者の  
 朱  
 白

繩を通す  
 梅と  
 横つづつる〜〜

寛文の頃、延室の頃、振袖をきく女、編笠と被せり、老を衣ひく、編笠と云也、故き手、彌多、又武士も、乃見と云、

○圖り、僧の空の下、霞面、西、人目を知る、休より、大、人、欺の如く、買直の風俗、今、衆と、衣、店、色、

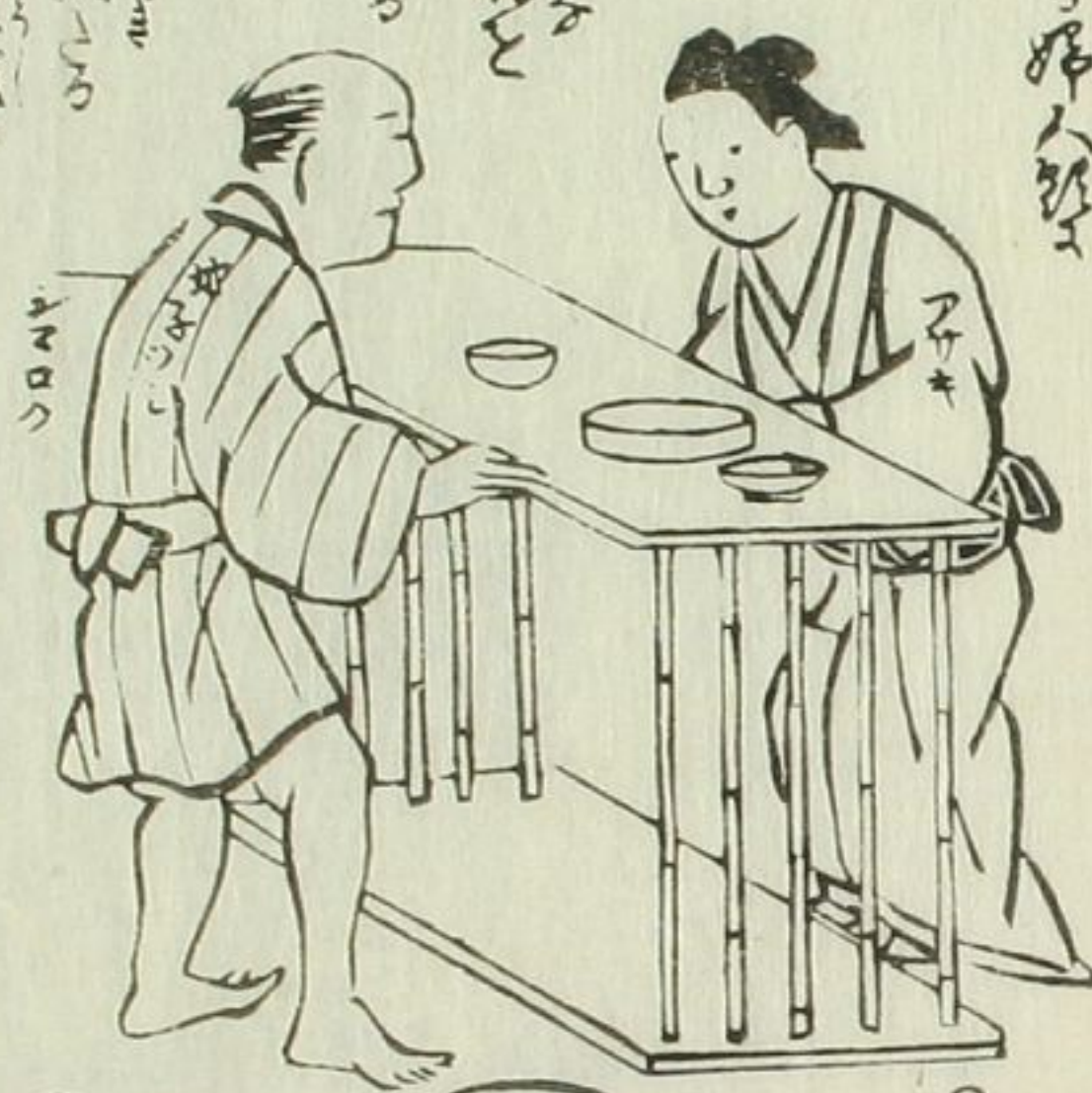


○此人物の医者、或云、因云、或云、



休餅の医、純子の、羽、月、俗、

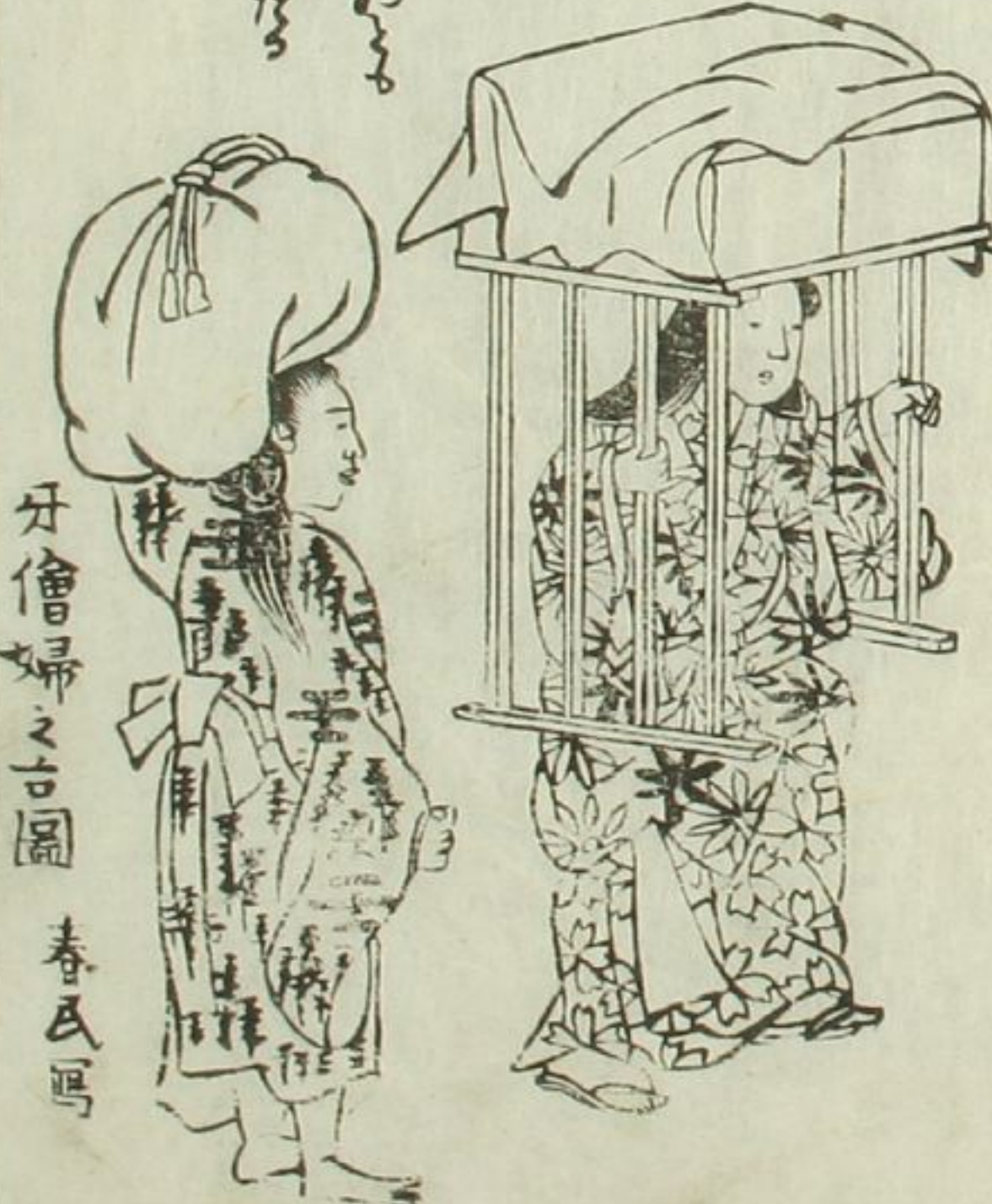
古くは、人、の、社、は、正、月、西、日、西、日、西、日、



○女、今、九、

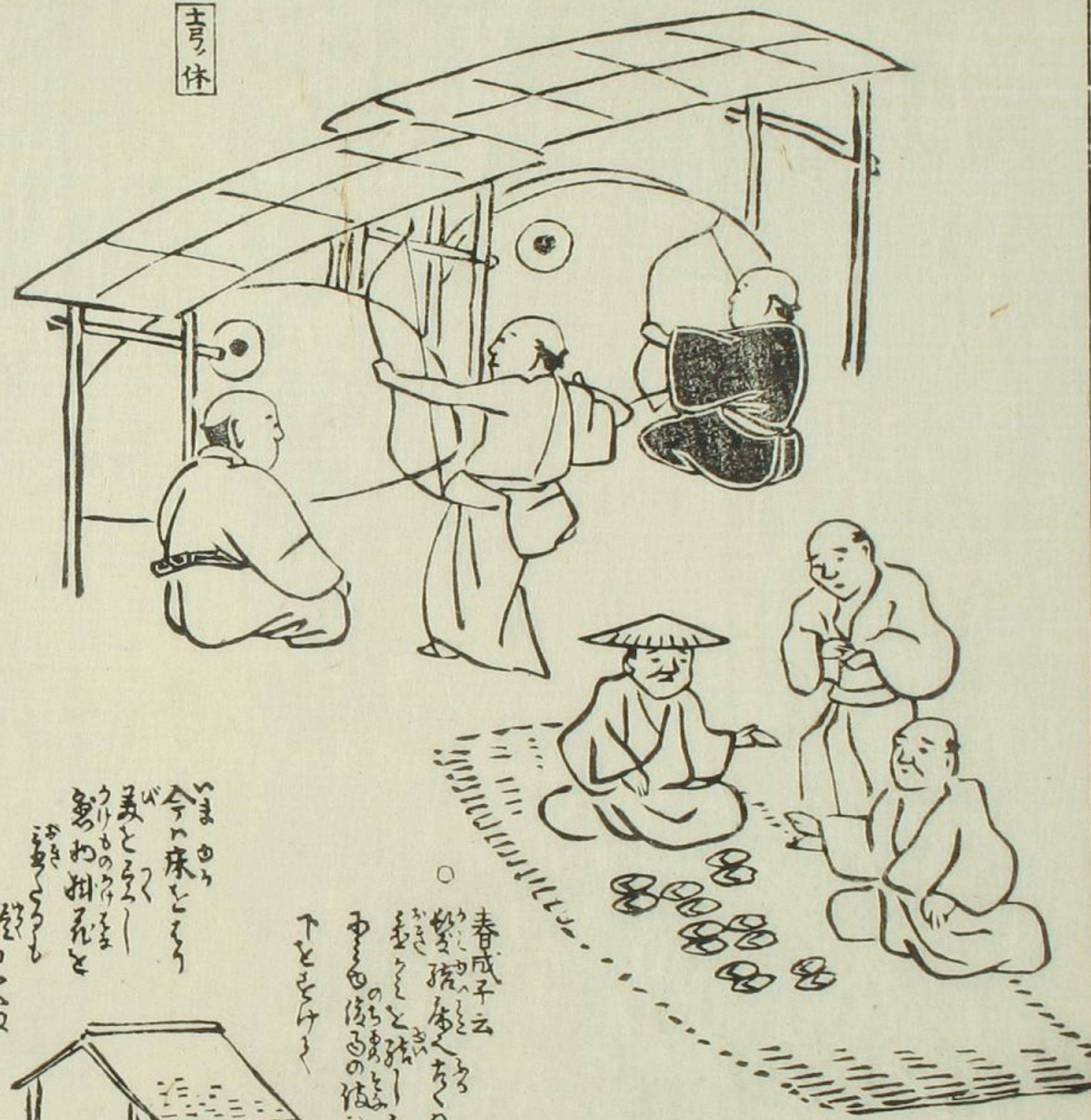


○此、其、大、

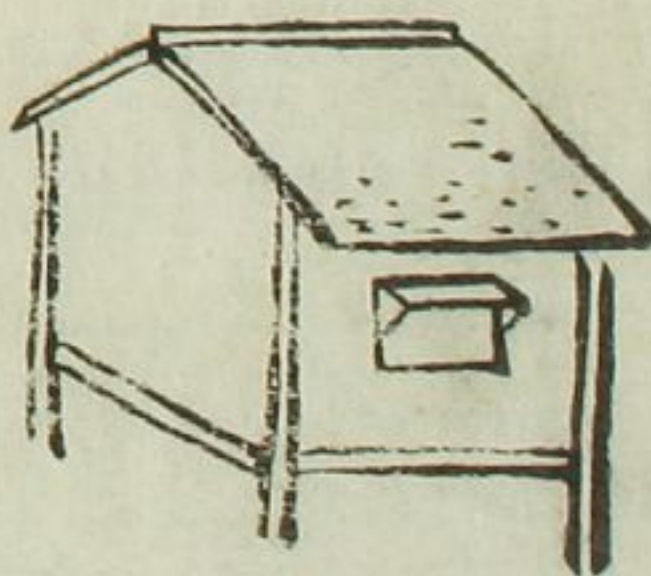
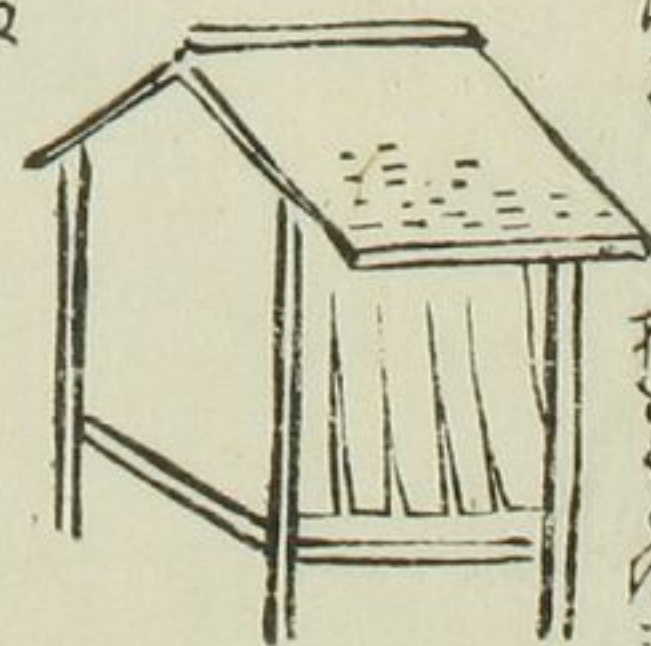


丹僧婦之古圖 春氏画

主身作



春成云  
 此は昔の  
 寝具の様  
 今も  
 用ひられ  
 たり  
 此は昔の  
 寝具の様  
 今も  
 用ひられ  
 たり  
 此は昔の  
 寝具の様  
 今も  
 用ひられ  
 たり  
 此は昔の  
 寝具の様  
 今も  
 用ひられ  
 たり



延宝の頃の婦人多く編笠竹の皮笠を被り  
 其上に笠を被り元禄の末よりを体も皮笠  
 或は布を笠に付けたり  
 今も哥比丘尼は此風はくくゝん

古の婦人の姿をさるる中緋の衣履を被り  
 中緋は上野の縷右の色の縷は  
 今も用ひられ  
 たり  
 此は昔の  
 寝具の様  
 今も  
 用ひられ  
 たり



白を被り足下は  
 形勢不敬も僧人宛を  
 仙人の天上より墮つるもの

地百廿二才

アカ

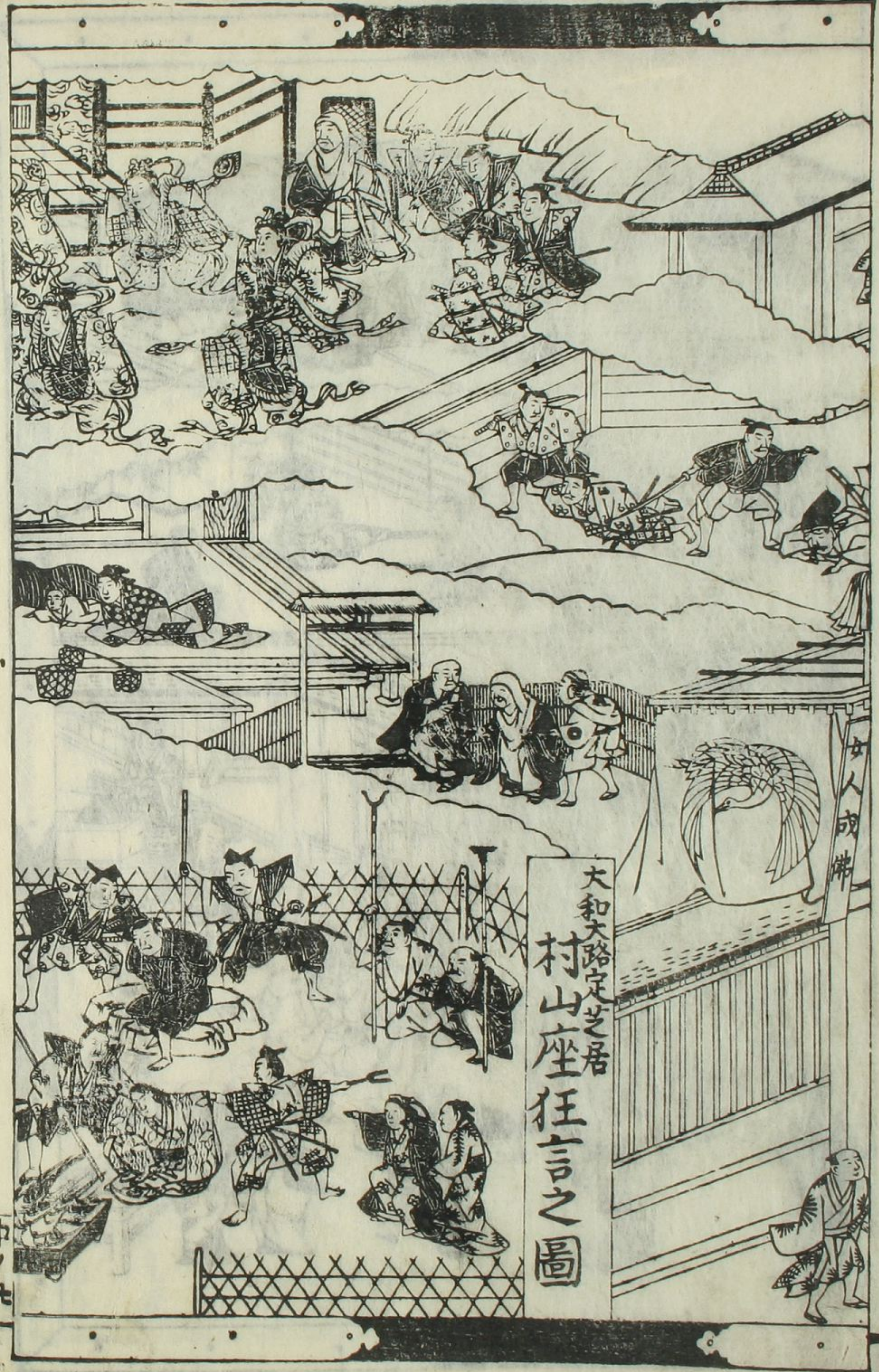
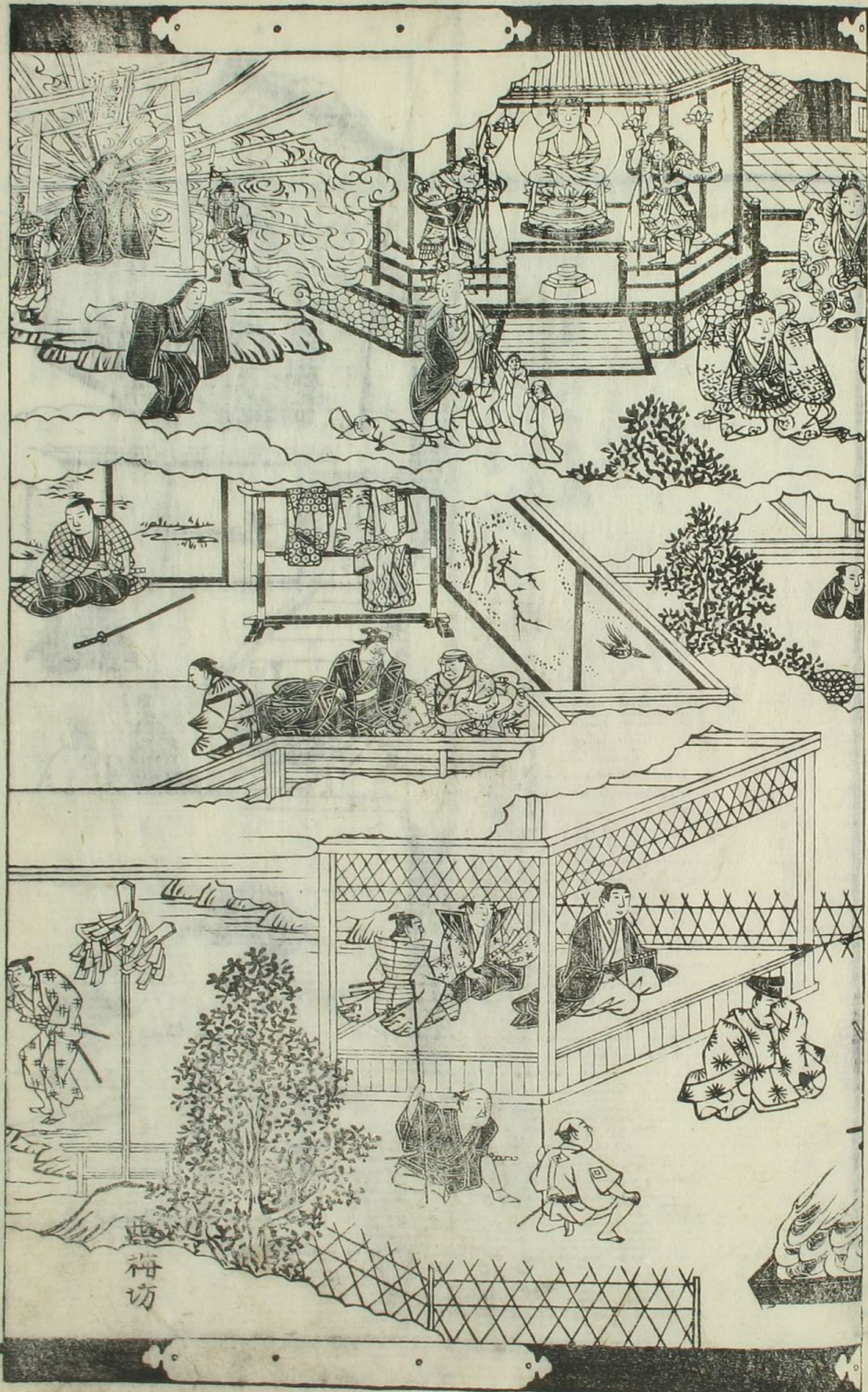


今に如く小倉堤と豊原之間の時より始り此大和路乃繩より祇園と  
き耕作の地より繩より住家より移入を祇園の西門よりよりと  
より古き地より。寛永の頃此堤下畠地より元結を修る事なれば  
青く堤の上より青くより繩より元結と移り今もこれを街の名物  
と云ふ事とす。強中人和太修り等に大和ありは傍に井あり  
或時と初進相撲の小屋代接へ。又薩芝居もありぬ寛永正徳乃  
頃四條の北東乃比小拾新斗比長屋を建ぬ昔を根行志本の  
写に接く奥の一角す汁路邊付の日小屋あり。新中を流色深の水  
引暖を原を掛長く四角より大新燈を臺に揚ぐるはよ水石を范  
。竈も棚をと並に客あり。煙も紙吸付く客は客を以  
此店より他所より短ぐ軟め並に店代用と火を焼けて軟すを隈  
を拓く。人澤名として菅原屋と云ふ。秋も並に井あり大和燈と云く澤

名と云く其女の衣服を金中本條も模倣式と云入るは或は或は  
一の清和八付より。此店にて多くあり。祇園此店の人家並に建  
に替へるは屋敷屋敷のよりしが。是より遊に水建。店代の業と女  
あふむ酒を知り今人如く無光の地とあり。享保の始より表家田  
畠の地より水を建末末所。富永町新橋通新門前。古門前等の所と云す。  
四條より南に京通。古の地より建に寺より。西に河原より。表社其南に  
方に大倉のより。此後長明庵と和州及び京の國より。後之京の  
西の野に地蔵。其の傍。享保の頃より遊。家代建。建に寺町宮川  
町。其の地恒町と云ふ。此街と京の南より。四條の北東町計まで。新河京町と云  
人屋敷地として先年町と。呼ぶ事と川端境の上より家居。裏の川より  
先年の町。もより澤名として菅原屋と云ふ。秋も並に井あり大和燈と云く澤

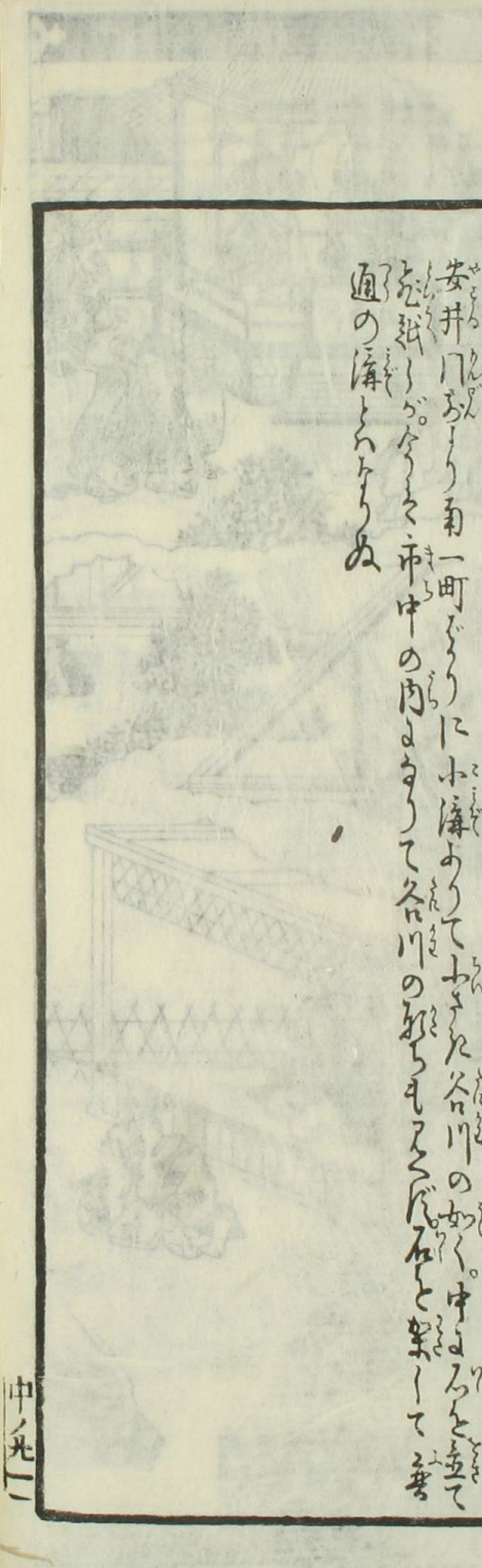


祇園はる市の方より西へ林をへ春樹霞装束をして月の秋をさるの路  
をゆくもなほ州吏科の豊多に形方懸なりて新吏科を結ぶ。名月の  
秋を安井門より。祇園の南。河原の坊。林をを長く。猶も里道の此  
坊。取。秋。ま。て。月。を。ま。と。り。こ。の。本。は。役。進。場。を。開。い。て  
人。家。建。後。の。河。を。流。る。に。坊。を。く。筋。新。吏。科。の。名。夫。り。  
秋。の。旺。時。を。あ。ら。う。て。脱。女。百。合。を。い。ふ。多。なる。女。り。脱。女。あ。ら。う。  
して。脱。女。百。合。を。い。ふ。百。合。女。も。入。る。百。合。女。も。ま。あ。り。脱。女。の。妻。の。名。も。  
脱。女。の。人。は。い。ふ。人。か。又。安。井。門。前。より。南。に。東。の。街。ま。で。東。の。方  
る。八。坂。塔。り。道。ま。で。一。面。の。間。や。西。の。言。い。違。に。寺。の。教。な。り。安。永。の。始  
り。ま。で。脱。女。の。名。馬。を。い。ふ。又。蛇。の。園。子。の。名。也。城。道。の。名。也。  
と。ら。ぬ。小。治。う。て。六。通。津。皇。寺。へ。通。ず。其。後。東。は。右。に。日。少。夜。七。八。新。建  
て。秋。夜。の。ほ。い。ろ。ろ。し。が。ま。見。入。道。く。人。家。建。後。の。筋。り。蛇。の。園。子。も。建  
築。日。少。夜。七。八。新。建。し。つ。り。八。坂。ま。で。の。道。も。今。の。所。も。い。ふ。こ。り。





安井門ありし町に小海ありてわきた谷川の如く。中よりを立て  
 を紙にうぐりて市中の内よりして各川の形もえりて石と築いて無  
 道の海とらうぬ



中ノ丸二

○大和入路是芝居湯殿山女人往生礼言文圖

紙國社為所描

天和二年 月直清親筆

大和乃頂大和入路 遺徳子あり今戸く及也  
 紙國社の入りありて他は 四葉の北小定芝居あり。其内なる村山氏の  
 芝居の礼言文圖とふふなり。名代を村山又と清言とふは先  
 祖を村山又と名ありて之を所家小は不明曆乃く免其代乃又  
 去清言并舞妓芝居を起すて建るあり。湯殿山女人往生の  
 礼言文圖ありて今をを求むるも得ぬ  
 天和二年の月直清親筆



其の代大和の甚なる立及し佐川主なる日  
 物ハす相日と村山あり。後天の  
 十年後及ハハ裁なる所あり。其の  
 中の名あり清言と云ふ









飛弾。如く物まぬ。岡村三弁と清。清は利標。字は加吉。父は伊勢守  
之内。日竹幸三。使は代竹。和。日。清上野。日。花河内。清。源。源。誠  
後。日。虎。倉。森。を。使。探。留。取。清。源。清。源。外。記。七。郎。之。清。日。御。記。門。十  
弁。説。經。漢。法。日。暮。八。丈。日。暮。小。丈。其。外。取。下。物。ま。ぬ。遠。花。小。丈。清  
源。源。源。等。の。名。代。ま。ぬ。も。思。考。

○秋。森。妓。ま。ぬ。ま。ぬ。元。出。雲。の。大。社。乃。巫。子。國。女。之。か。女。水。録。の。頃。大。社。於  
夜。勸。進。の。之。之。國。女。宮。色。好。婚。と。云。く。妖。麗。と。云。く。や。り。り。と  
神。事。舞。女。の。氏。名。は。ま。ぬ。一。年。却。小。堂。乃。室。町。家。我。思。考。  
也。巫。子。の。之。之。國。女。宮。色。好。婚。と。云。く。妖。麗。と。云。く。や。り。り。と  
優。優。と。一。言。一。言。秋。森。氏。の。秋。森。氏。名。高。く。信。長。公。豊。之。國。の。所。在  
も。出。其。秋。森。高。貴。乃。門。以。入。之。態。を。為。す。其。侍。天。下。皆。以。之。自。夜。を。名。す。  
水晶。の。板。を。首。に。懸。く。舞。女。を。載。り。て。舞。ふ。之。氏。天。下。皆。以。之。自。夜。を。名。す。

秋。森。氏。の。秋。森。氏。名。高。く。信。長。公。豊。之。國。の。所。在  
も。出。其。秋。森。高。貴。乃。門。以。入。之。態。を。為。す。其。侍。天。下。皆。以。之。自。夜。を。名。す。  
水晶。の。板。を。首。に。懸。く。舞。女。を。載。り。て。舞。ふ。之。氏。天。下。皆。以。之。自。夜。を。名。す。  
秋。森。氏。の。秋。森。氏。名。高。く。信。長。公。豊。之。國。の。所。在  
も。出。其。秋。森。高。貴。乃。門。以。入。之。態。を。為。す。其。侍。天。下。皆。以。之。自。夜。を。名。す。  
水晶。の。板。を。首。に。懸。く。舞。女。を。載。り。て。舞。ふ。之。氏。天。下。皆。以。之。自。夜。を。名。す。

秋。森。氏。の。秋。森。氏。名。高。く。信。長。公。豊。之。國。の。所。在  
も。出。其。秋。森。高。貴。乃。門。以。入。之。態。を。為。す。其。侍。天。下。皆。以。之。自。夜。を。名。す。  
水晶。の。板。を。首。に。懸。く。舞。女。を。載。り。て。舞。ふ。之。氏。天。下。皆。以。之。自。夜。を。名。す。

四つに... 一の橋... 二の... 三の... 四の...  
 此の... 是れ... 夫れ... 此れ...  
 今... 昔... 昔... 今...  
 湯殿山出る野の画

女子減せらるゆゑふ兼應の初矢...  
 御免を考ふる物事似ね云...  
 再興... 奇洋妓相續...  
 其妻の奴者...  
 及び諸君...  
 雲々...  
 挑燈...  
 夫は...  
 今の...

○六方之圖

清水寺本堂外陣は指く

六方... 使者... 南園... 丹後...  
 又丹前六方と滑... 寬永... 丹後...



今... 其... 今...  
 今の上... 其... 今...

元禄七歳甲戌九月十日  
 奉掛御寢  
 前志げ花  
 元禄七歳甲戌九月十日  
 奉掛御寢  
 前志げ花  
 采女さんど立ち姫女と徳宮壇成く使者の風あり人澤をて丹赤が



六方とふみ始りまより長流身舞妓も徳宮壇成く奉掛御寢六方と櫻の  
 自ら舞の一首なり。奴舞六方以振と云あり。扁額と圓とを名衆の振  
 持御事一首中を纏ひ萬葉形の地紋に付衣袴を着し草履  
 の地紋多く用文相と持て振の侍傍に志げ花と記し松山と云  
 銀の梅山志げ花と云元禄の頃此舞妓も衆六方の徳宮と成りて  
 己と云し代馬小指と云あり

○慶長の頃佐渡嶋に國舞女以衆を成りて  
 女舞も温吹き半多しと云實永年中女舞舞妓を止りて此尻赤  
 舞妓といかりぬ中凡の流舞女も減りて心を以て美少年の扁額の装を  
 刺せ頂の上を許髪をも先紙捲をのりて結ぶ足を野郎と云  
 ○漢土に勾欄の及者以戲子をも男倡をも云野郎と治郎と云李白  
 採蓮曲に岸上誰家遊冶郎と他と云。女の形乃如く修り不害と云男

を龍法郎せりす此故ら

○紙摺を修ふ親世後と云世支修と文明の以親世は式と云れ其の  
の鳥帽より親世に紙摺を合し用ひてむと云り今も余の所  
を更と親の鳥帽子の親世は組紙を用ひてても親世は日今も紙摺  
と用ひて親世の鳥帽子の

○武流云元禄入娘は秋野はと云と奇縁故者も其縁を付類の  
俤見苦やして其の帽子を修ふ被娘たり叶帽子の左右に紅の糸を  
付るは門々様より帽子もとり此帽子を載る赤髪を修ふお髪を  
けり者や異あつばさ如く今も秋野前帽子と云

○大森彦七負鬼女圖

清水寺幸堂外陣に招く

延享三年 法眼春十画

傳云伴縁國住人入森彦七盛長と云後不飲力も普通の人な依れ  
し血氣の房者なり。建武三年足利氏御九州より攻より持石深川水

て新田義貞楠正

兩勢や合戦の時彦七を一旗の細川卿律師

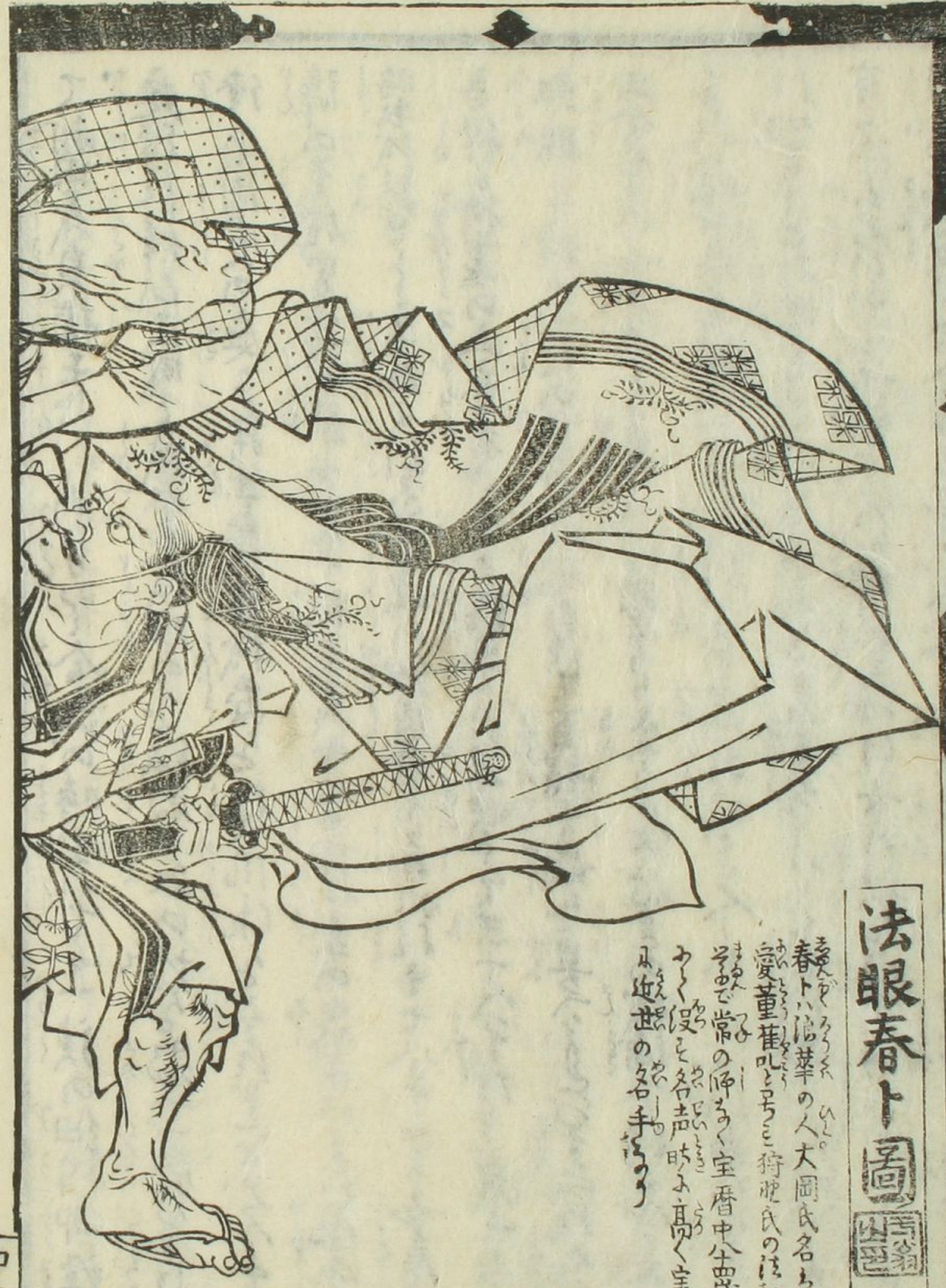
定得に修し止成と云れ或功あり。後叔と云の地を賜ふ一旗曾修し  
清く。洲堂の庭より其甚く布核髪を接風流を修るを修るを修るを  
隣の半依男女群を修る半親と云彦七其縁衆の衆みは其風流の衣  
將衣は修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを  
き修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを  
邪眼して修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを  
田舎の女房も修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを  
もれぬ女房も修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを  
に修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを  
有るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを  
國志の修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを修るを

延享三丙寅年秋九月下浣

大坂

願主中村七良兵衛

宿坊  
成就院



法眼春卜圖

春卜は法華の人々大岡氏名を  
愛董董植ひて子と侍従氏の法を  
そと常の侍るく宝曆中全曲歳  
かく没と各声時ふ高く実  
且世世の名手なり



が寝て居て歩けりやとぬいさしにさういふ人こそまて行根をうたせと見  
 て。産七惚へはさるもわさう深き道に彼まで負あつた人と。女は背ふお  
 肩うさき町半のうさうさ。お陰の月暗きおとてけり。各處をうた女は長  
 八人汁の鬼女にまじ。雙の眼と後の面は酒がぶく。はと耳まで。お陰  
 南生きた申大盤石のぶく。産七が髪は掴んで虚空の上へ。産  
 別の産を産けりやとさういふ組。まの深田の中。お陰の産に生れものを組  
 産うさき呼く。さういふ産うさう。お陰の産を長刀を因うて。産  
 来る因はゆき。お陰の産。以上を筆記。ええ

都繪馬鑑三之卷終

